

遷延性意識障害患者と嚥下訓練

Dysphagia rehabilitation for patients in a persistent vegetative state

服部 知枝、中村 美津、石山 光枝、奥村 歩、篠田 淳
木沢記念病院 中部療護センター

CHIE HATTORI, Mitsu Nakamura, Mitsue Ishiyama, Ayumu Okumura, Jun Shinoda
Kizawa Memorial Hospital Minokamo City, Gifu, Japan

【はじめに】交通事故により頭部外傷を負った遷延性意識障害患者の栄養補給は主に経管に頼っており、当センターに入院している患者の約71%に経管栄養が行われている。当施設では意識覚醒を目的とした五感刺激の1つとして嚥下訓練を行っている。入院時にアセスメント表を用いて嚥下能力の評価を行い、入院時の追視の有無・意識変化が嚥下能力の向上に関与するか否かを検討したので報告する。【方法】対象：開院後入院した61名のうち嚥下訓練を実施した患者47名。方法：東北療護センター遷延性意識障害度スコア表を使用し、入院時の「眼球の動きと認識度(以下、追視)」「表情変化」の有・無により、半年後と1年後の嚥下能力を入院時と比較、検討した。【結果・考察】訓練により嚥下能力の向上が見られたのは全体で半年後に32%、1年後に43%であった。入院時に追視がみられた患者の場合は半年後に39%、1年後には48%で嚥下能力が向上した。追視がない患者では半年後に14%、1年後では30%の向上が見られるにとどまった。また声かけて表情変化が見られた患者の場合は半年後に35%、1年後に46%の向上が見られた。表情変化が見られなかった患者では半年後に25%、1年後に36%の向上が見られた。追視ありの群はなしの群と比べ、半年後には嚥下能力の向上率は2倍以上であった。追視なしの群はありの群と比べ嚥下能力の向上率は低いが、長期実施すれば嚥下能力が向上する可能性がある。以上の事より入院時の追視・表情変化は嚥下能力向上に関与している可能性がある。